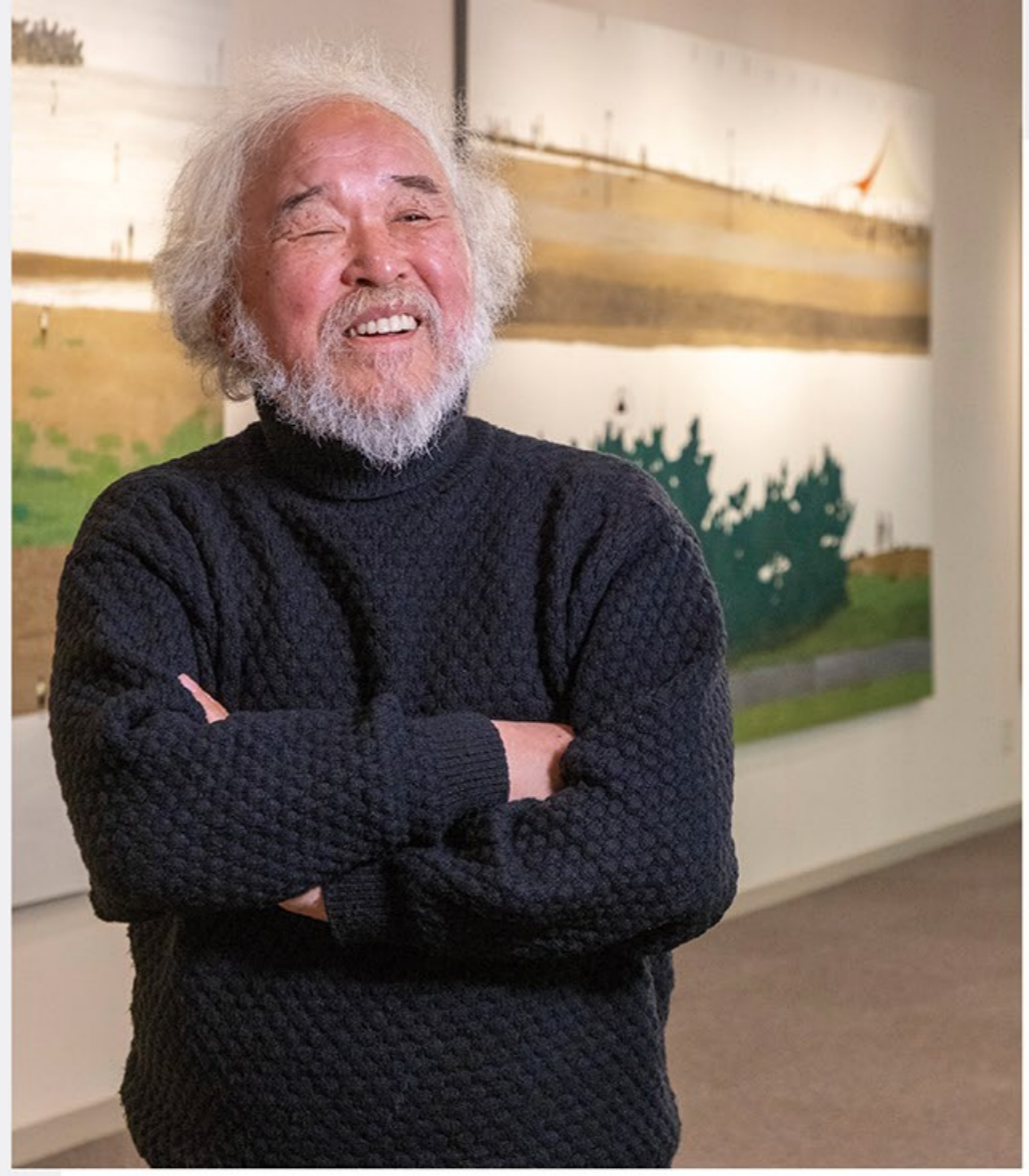




日本画家 米谷清和



雨や風、自然が見える1枚の風景を前に 聴こえてくる「音」に耳を澄ませてほしい

花びらが舞う桜、海辺に集う人たち、男の姿と公衆電話：ハーモニホールふくいの2階展示ギャラリーに並ぶ10点の日本画。詩的な雰囲気漂う作品群を手がけたのは、福井市出身の日本画家・米谷清和さんです。

展示作の中でひととき目を引くのは、3点の連作「雨上がりの音」。白と黒の色彩と踊るような筆致で「音」を印象的に表現したシリーズ作品です。米谷さんは「音楽が奏でられるホールにこの連作が飾られるのはとてもうれい」と話し、「雨の絵から音や風景を思い起こしてほしい。観る人によって雨の思い出も聴こえる音も違うはず。どんな音が聴こえたのか、私に教えてほしいですね」と顔をほころばせます。

作品を前に米谷さんは、「何かが生まれるということ、何かが壊れるということでもあり」と言います。例えば湾岸に立つ人々を描いた作品は、埋め立て後は自然豊かな場所であったこと

とを忘れてしまう人間の記憶の不確実性をあぶり出したもの。代表作の一つである、駅ビルから流れ出るサラリーマンの雑踏を描いた「秋、日の無い日」(福井県立美術館蔵)は、米谷さんが上京して最初に目にした光景で、「都市の風景の中に人の日常と時間があることを意識して描いた」と言います。

昨年、福井県立美術館で自身の画業を振り返る展覧会を開催。高校時代の油彩画など初展示の作品や恩師の代表作など、多彩な作品が並びました。「絵には描かれた理由や狙いが必ずある。展覧会は過去の自分を知る機会になった」と感慨深げです。

感じ、思い、心の赴くまま、衝動に重きを置いて創作に向かう米谷さん。同じ作品でも、時代背景で持つ意味が変わることも織り込み済みで、「私の絵を見て思い出す景色はそれぞれだから、解説にとらわれず自由に鑑賞してもらえれば」と締めくくりました。



「雨上がりの音」シリーズ(1998年)。右は水たまりに映ったケヤキ、真ん中は側溝に流れる水の様子、左は噴水から出る水と上から落ちる水の連なりを表現している。



さまざまな素材が並ぶ東京のアトリエ。

よねたに・きよかず ●福井市生まれ。高志高等学校卒業後、多摩美術大学日本画科へ進学。在学中に横山操奨学金を受け渡敗。1972年日展に初入選。「新しいタイプの絵」として紹介される。作家活動の一方で多摩美術大学教授として45年勤務し、後進の指導にあたった。現在は退官し東京にある自宅アトリエで制作に専念。2002年、2023年に福井県立美術館で展覧会を開催。

■作品展のお知らせ
「米谷清和-音と情景」展
2024年6月1日(土)～6月30日(日)
ハーモニホールふくい展示ギャラリー
※5/30はオープニング・ギャラリートーク開催。
7月以降は裏表紙掲載公演日にご覧いただけます。

アートの息吹

問屋町ランドマーク(福井市)



本社屋上に設置されたオブジェ。応募総数20作品の中から、明石工業高等専門学校(兵庫県明石市)の「FUKUI EYESIGHT SCAPE」が選ばれた。日没から10時頃までの間、気象庁のデータに応じて赤、オレンジ、青などに変化。正月などイベント時にはレインボーカラーに彩られる。

株式会社 永和システムマネジメント
1980年創業。「アジャイル開発」によるソフトウェアの開発・構築で全国的な知名度を持ち、福井を拠点に金融・医療などの分野でDXを後押しする。創立10周年を迎えた1990年に、現在の本社ビルの南側部分を新築。10年後の2000年に北側を増築し、現在のツインビルとなった。福井市問屋町3-111

※「アートの息吹」は県内企業のアートを通じた社会貢献活動をご紹介します。

ソフトウェア開発で全国に知られる永和システムマネジメントの本社は、福井市の問屋町にあります。昨年12月、その屋上に巨大な恐竜の卵のオブジェが登場。これは同社が開催した「ランドマークコンペ@福井市問屋町」で最優秀賞に輝いた、明石高専の作品がベースになっています。卵は夜間、天気によって色を変え、イベント時はレインボーカラーに。土台部分にはめがね王国ふくいにちな

み、ランドルト環がデザインされています。

「会社の場所がわかりにくい」という声を受けて、目印を作ろうと企画。せっかくなら若者の自由な発想を形にしようと、全国の建築デザインを学ぶ学生からデザインを募集しました。北陸新幹線の延伸開業で来客が増える問屋町の新たなランドマークには、次代に託す思いと、担い手である若者のアイデアが詰まっています。

ぶんかの足跡

小野忠弘

(美術作家)

青色を基調に廃材を使って大画面に宇宙的な空間を創り出し、国際的芸術展でも高い評価を受けた小野忠弘。その名は死後も美術史に刻まれ、海外での精力的な発表と共に、坂井市三国町では教育者として後進の育成に努めたエピソードが伝わっています。

青森県出身の小野は、縁あって三国中学校(現・三国高校)の美術教諭として赴任。福井大学工学部では造形学の講義を受け持ち、多くの若者に影響を与えました。町の人や教え子たちの回想録には「やかんの色は黄色じやない!光が当たって緑や灰色やいろんな色が見えるはずだ」絵がさかさまだ!この絵はこちらから見るんだ!と熱弁を振るう様子が。こうした小野スピリットに刺激を受けた若者の中から、世界的に活躍するアートディレクターや建築家なども生まれています。

小野は三国町の景観の素晴らしさ、文化財保護の重要性を説き、東尋坊を描いた絵や、海や花をイメージしたモザイク画などを各所に寄贈・提供しています。終生、活動拠点を三国町から移すことになかった小野。現存する高台のアトリエには、この土地を愛した彼の創作の魂が残されています。

【おの・ただひろ】
1913年青森県弘前市生まれ。東京美術学校(現・東京藝術大学)彫刻科を卒業後、1942年に三国中学校(現・三国高校)に美術教諭として赴任。疎開していた詩人・三好達治とも交流した。サンパウロ・ピエンナーレやヴェネツィア・ピエンナーレに出品し、漂流物や廃品を素材にして制作する「ジャンク・アート」の旗手として高い評価を受ける。アメリカの雑誌「LIFE」で紹介され活躍の場が広がった。2001年死去。



ONO MEMORIAL (オノ・メモリアル)
河口に広がる三国の風景が一望できる場所にある小野忠弘の住居兼アトリエ。死後、彼の象徴的な青色を外観に配したギャラリーを併設。定期的に企画展を開催している。

住所 / 坂井市三国町緑ヶ丘3-6-13
開館日 / 3～11月の金・土・日および祝日 10:00～16:00 無料
電話 / TEL.0776-82-5666(坂井市龍翔博物館)